

二〇二〇年度 同朋大学 1期(A方式)入学試験 国語 問題表紙

【注意事項】

- 一、 試験開始の合図があるまで、問題用紙は開かないこと。
- 二、 設問 一 現代文は共通問題である。全員解答すること。
- 三、 設問 二 現代文と設問 三 古文は選択問題である。いずれか一方を選択し解答すること。
- 四、 解答は、解答用紙に記入すること。  
(設問 一・二 用、または、設問 一・三 用のいずれかを使用する。)
- 五、 「始め」の合図とともに、解答用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入すること。



## 〈共通問題〉

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

本はこれからどうなるかと問われてもぼくにはわからないが、しかし自分にとって本は生きていくために必要不可欠なものであり、おそらくこれからもその位置づけが変わることはない。

人生の(a)キロに立たされたとき、いつもそばには一冊の本があった。高校生のときにはじめてインドへ一人旅に出たときも、アラスカのユーコン川をカヌーで下ったときも、北極の小さな村からスキーを(b)履いて南へ向かったときも、満身(c)創痕の体でエベレストに登ったときも、その都度、あらゆるジャンルの本にぼくは励まされ続けてきた。

優れた一冊の本を読むことは、未知へ向かう旅に出ることと同様の意味をもっている。「千書は万里の旅」とはよくいったもので、この故事に従えば、一冊の書物を読むことは十里、すなわちおよそ四〇キロの旅に相当する。人が歩くスピードを時速四キロとするならば、一冊に込められた言葉を読み解くことは一〇時間かけて四〇キロを歩いた旅と等価ということになる。

そのあいだには様々な出会いがあり、発見があり、もしかしたら感動もあるだろう。逆に歩いたことが後悔されるほどに、(d)ムイな時間を過ごすことになるかもしれない。しかし、A旅と読書に貫通する性質はそこにある。たとえリスクがあっても、ページをめくらなければいけないし、足を一步踏み出さなければ何もはじまらないのだ。

「読書とは旅である」とは人口に膾炙した言い方かもしれないが、ぼくには単なる比喩には思えない。(1) (2)、ブルース・チャトウインの『ソングライン』を読んでいたときの自分は、確かに冒険の(e)トジョウウにあり、そこで起こる精神の運動には終わりがなかった。ページをめぐることは、ぼくにとって荒野を歩くことそのものなのだ。

そして、目の前の新しい世界を提示してくれる存在であれば、それが紙の本だろうが、電子書籍だろうが、自分にとってはどちらでもいい。ただ、電気を自由に使えない場所に行くことも多いので、電子書籍に限らず、デリケートな扱いを

要求される機械類は昔から必要最低限のものしか持ち歩かなかった。( ② )、このような時代になっても電子書籍を旅に持っていこうという気持ちがぼくには薄い。

紙の書籍であれば、バックパックの奥底に押し込んでも大丈夫だし、氷点下でも炎天下でもそこに刻まれた文字が消える心配はない。砂塵が舞う沙漠でページをめくることができると、埃まみれの安宿でも安心して本を開くことができる。どんな環境でもある程度の機能が保証されるなら、いつか電子書籍を旅にもつていくことがあるかもしれないけれど、果たして自分が生きているあいだに、B そのような信頼を電子機器に抱くことがあるだろうか。

C 本の未来を考えるときにいつも思い出すのが、先史時代の壁画のことである。数カ月前、ニューヨーク、サンパウロ、ブラジリア、テレジーナと四回飛行機を乗り継ぎ、さらに車で一〇時間走り続けて、ぼくはブラジル中西部にあるカピパラ山地という場所を訪ねた。ここには、およそ一三万ヘクタールという広大な (d) シキチのなかに六〇〇カ所を超す先史時代の壁画が残されている。

あたりは、棘のある植物がしぶとく生い茂る荒野になっていて、あちこちで山火事の煙が見られた。こうした植生を地元の人はポルトガル語で「カアチンガ」と呼んでいて、壁画が多く残るオーストラリア北部などもよく似た環境になっている。日射しは肌を射るように強く、湿気がないために光が淀まずに直接皮膚を焼く。これだけ乾燥していれば、乾いた木と木がこすれて野火が生じるのも無理はない。

カピバラ山地の最高標高地点である六一〇メートルの崖から遠望すると、小高い山脈が地表を縫うように、地平線まで終わりなく続いていた。壁画が描かれた一万二〇〇〇年ほど前には、ここも緑あふれる (g) 肥沃な土地だったらしい。周辺の谷には川が流れ、魚も存在したというが、今では乾燥して赤茶けた砂岩地帯になっていて見る影もない。( ③ )、環境は激変したにもかかわらず、この無人の山脈の壁に数千年前の小さな壁画がいくつも描かれ、それが現存していることは驚くべきことである。

土や岩から作られた鉱物質の顔料、草で作った筆、岩の窪みを利用した硯のそばで彼らは岩壁をキャンパスに、あるい

はノートに見立てて絵や記号を描いた。壁画はいわば彼らの歴史が記された図書館であり、数十年、数百年の記憶を示すビジュアル・アーカイヴとして機能している。先史時代の人々ばかりではない。オーストラリアのアボリジニなどは、現在も壁画を描き続けているし、**D**それが世界を認識するための指針として今もコミュニティのなかで有用なのだ。

描き手のいない壁画群が点在するカピバラ山地は、人がいなくなった世界の終末を見ているかのようなだった。生々しい人の痕跡がいくつもありながら、それを創りあげた人間は誰一人として生きていない。一つ一つの画像にどんな意味があるのか、推測はできても確実な説明など誰にもできやしない。しかし、壁に残された壁画だけは、この星がなくなるまで存在し続けるだろう。**E**ここにあるのは懐かしき未来の地球そのものである。

「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」

『悲しき熱帯』の終盤に刻まれたレヴィストロースによるかの一節がぼくの頭の中を**(h)反芻**する。ブラジルでのフィールドワークの一部始終と追憶、そこから得た知見と**(i)ジツツカイ**によつて、人類史の一断面を鋭く**(j)屹立**させる彼の記述は、太古の壁画の前でより切実に自分のなかに響いた。

先史時代の人々は、こうした世界の始まりと終わりを見越していたかのように、彼らの生の断片をカピバラ山地に残して、この世を去ってしまった。**I**に取って代わった**II**は、同じように世界が終わるまで、存在し続けることができるだろうか。少なくとも人がいなくなった無人の荒野で、人類の歴史を語るのは**III**ではなく、物質に刻まれた痕跡としての**II**である**とぼくは思う**。

一冊の本はこれからもその役割を失わずに、自分の生を支えてくれるだろう。ページをめくって文字を追う。そこから広がる世界には、過去も未来も含めた限りない未知の荒野が続いていて終わりが**F**肉体的な旅に出られなくなつても、**ぼくには本がある**。自分がいなくなつても、世界には本が残されている。死ぬまで歩き続けること、それを可能にしてくれる代え難い装備、それが自分にとっては本ということになる。

(石川直樹「歩き続けるための読書」による)

問一 波線部(a)「キロ」、(d)「ムイ」、(e)「トジョウ」、(f)「シキチ」、(i)「ジュツカイ」を、それぞれ漢字に直せ。

問二 波線部(b)「履」、(c)「創痍」、(g)「肥沃」、(h)「反芻」、(j)「屹立」の読みを、それぞれひらがなで答えよ。

問三 二重傍線部「人口に膾炙した」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人々の意識から消えた
- 2 社会から批判を受けた
- 3 知識をひけらかした
- 4 多くの人がわからない
- 5 世間に広く知れ渡った

問四 空欄( ① ) ( ② ) ( ③ ) にあてはまる語として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で

答えよ(番号は重複できない)。

- 1 しかし
- 2 または
- 3 例えば
- 4 従って
- 5 仮にも

問五 空欄 

一
---

二
---

三
---

 にあてはまる語として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答え

よ(番号は重複できない)。

- 1 電子書籍
- 2 活字
- 3 壁画

問六 傍線部A「旅と読書に貫通する性質」について、筆者の考えとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 さまざまな出会いや発見があるものの、最終的には、その行為自体を後悔することになる。
- 2 歩きながらページをめくることで、本の中の情景を現実世界そのもののように実感できる。
- 3 自分を決して裏切らず、いつも自分を励まし続けてくれる、人生になくてはならないもの。
- 4 精神の運動を活発にし、日常的な世界に固着した意識を、非日常的な幻想へ導いてくれる。
- 5 後悔や危険を恐れずに動作を進めなければ、さまざまな出会いや発見、感動が得られない。

問七 傍線部 B 「そのような信頼」の指示語が示す内容を、本文中から二十字以内で抜き出せ。

問八 傍線部 C 「本の未来を考えるとときにいつも思い出すのが、先史時代の壁画のことである」とあるが、なぜ筆者は「本の未来を考えるとときに」「先史時代の壁画のこと」を思い出すというのか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 本が長い時間をかけて人々に育まれた文化であるように、壁画も、先史時代の人々が育んだ文化であるから。
- 2 長い時間がたてば、壁画の存在も風化していくように、本もいつかはその存在自体が忘れられてしまうから。
- 3 先史時代の壁画と同じように、地球上から人間がいなくなったとしても、本は存在し続けると思われるから。
- 4 本を読むことが感動を生み出すように、先史時代の壁画を見ていると、時を超えた感動が伝わってくるから。
- 5 壁画から紙の書籍へと記録の形式が変化したように、本もいつかは電子書籍などに変化していくだろうから。

問九 傍線部 D 「それが世界を認識するための指針として今もコミュニティのなかで有用なのだ」とは、どのような状況を示しているのか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 太古の壁画が、先住民族の存在を証明する痕跡として、現在も大切に保存されている。
- 2 人々に長く忘れ去られていた壁画が、現在になって、芸術として見直されてきている。
- 3 壁画を残すことが、少数民族となった自分たちの存在を、人々に示すことにつながる。
- 4 壁画が、重要な情報の記録として、現在の人々の生活の中でも意味を持ち続けている。
- 5 壁画を描くことが、何もない世界に命を吹きこむ行為だと、現在でも信じられている。

問十 傍線部 E 「ここにあるのは懐かしき未来の地球そのものである」とあるが、なぜ筆者はここで「懐かしき未来の地球」と表現したのか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人類が減びても、壁画だけは、人類が存在したことを永遠に証明し続けると思われるから。
- 2 いずれ人類は滅び、地球は、人類が誕生する前のはるか昔の状況にもどると思われるから。
- 3 昔、本で読んだように、近い将来、人類は世界を破滅へと導くことになると思われるから。
- 4 人類が壁画を描いたように、人類が減びても、何ものかが必ず壁画を描くと思われるから。
- 5 図像だけが残る壁画のように、文字も、いつかはその意味を失ってしまうと思われるから。



問十一 傍線部 F 「肉体的な旅に出られなくなっても、ぼくには本がある」とは、どういうことか。その説明として最も

適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 旅に出て実際に人々と会わなくても、本をとおして、自分の考えを多くの人に伝えることができるということ。
- 2 年をとって旅ができなくなっても、これまで自分を励ましてくれた本は、手元にずっと残っているということ。
- 3 旅をすることができなくても、本を読んで勉強すれば、知識を際限なく増やし続けることができるということ。
- 4 現実の旅では、未知の世界は少なくなっていくが、本の中には限りなく未知の世界が広がっているということ。
- 5 実際の旅に出ることができなくなっても、本を読むことで、さまざまな感覚を味わうことができるということ。

## 〈選択問題〉

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

いま、島田清次郎という小説家のことを知っているのは、近代文学を専門にしている研究者くらいであろう。その『地上』（大正八年）という作品が天下の話題になったのを知る人はもうほとんどなくなろうとしている。

島田清次郎は大正の文学青年から見て、まさに天才であった。それを疑うものはすくなくかつた。それがどうであろう。僅か六十年にして、ほぼ、完全に忘れられてしまった。当時としては、むしろ、A 夏目漱石の文学について疑問をいだくものが多かった。批判もすくなくかつた。それがいまでは国民文学として、近代文学において(a)比肩するものなしといわれるまでになっている。

大正の(b)チュウヨウにおいて、現在のことを予測し得たものはほとんどなかつたと言つてよい。流行というのはそれくらい人の目をくるわすものである。「現代」はいつの時代においてももつとも不可解である。古い時代のこととはよくわかる。あまり大きな見当違いはもうおこらない。それなのに、何でも直接に見聞して知っているはずの現在のことが実におからない。まれにわかつたと思うと、とんでもない判断をしてしまう。

文学史家はこのことをよく承知している。ときに、現代文学史を試みる人もないではないが、だいたいの史家は、現代に近づくことをおそれる。三十年、五十年前のところまでで、筆を止めるのが普通になっている。

それでも、新しいところへさしかかるにあたっては、「まだ、これらの作家、作品は、時の試練を經ていない。いま用意にその軽重をあげつらうことは慎まなくてはならない」といった意味の(c)常套句をかならずと言つてよいほど用意しているものだ。

その裏には、おびただしい失敗例がごろごろしている。なぜ、いちばんよくわかっているはずの目前のことがそれほどわからないのか。ひとつには、それまでの考え、それにもとづく B 流行の色眼鏡をかけて見ているからである。まわりが

ひとしくかけている眼鏡をはつきり一時的なもの(d)カンパすることは難しい。そのメガネ越しでは、新しいものがあらわれても見えない。たとえ見えても、怪奇な姿にうつるであろう。とうてい真の価値を見ることはできない。

もうひとつは、新しいものが、あまりにも新しいことが、本来の姿でない姿をさせていることがある。大工は生木で家を建てない。新しい木はいいようであるが、建築材料にはならない。乾燥してくると、ゆがむからである。変形する前の生木は、木材としては、いわば、仮の姿である。時間をかけて変わるべきところは変わらせてからでないと、家を建てることはできない。

新しい文学作品についても、ほぼ同じことが言える。作者の手を離れたばかりの作品は、生木に当たる。それは文学史という家を作るにはまだ新しすぎる。『時の試練』を経させて、風をあて、乾燥させる必要がある。

時間が経てば、たとえ微少でも、風化がおこる。C細部が欠落して、新しい性格をおびるようになる——これが古典化の過程である。原稿のときとまったく同じ意味をもったままで古典になったという作品は、古今東西、かつてなかったはずである。かならず、時のふるいにかけてられて、落ちるものは落ちて行く。

ときには、作品そのものが(e)マイボツしてしまうことがあるかもしれない。発表当時は、天下の(f)耳目をそばだたせた島田清次郎『地上』が半世紀もたないうちに、まったく忘れられてしまったのはその一例である。湮滅いんめつこそ免れはしたものの、生木のときとは、大きく違ったものになったという場合もないではない。

スイフトの『ガリバー旅行記』は十八世紀の作品である。もともとは当代の政治情況に対するきびしい諷刺であった。ところが、次の時代からすでに、読者にわからないところが出てきて、これは時代が下るにつれてますます多くなった。D一般に諷刺というものは、風化が急速に進むのが一般である。やがて、『ガリバー旅行記』を諷刺として読む人はなくなった。そこでこの作品は忘れ去られてもよかったのである。

ところが、新しい読み方が行われるようになって、これをリアリズムの童話に変身させた。それとともに、『ガリバー旅行記』の古典化が起こった。政治諷刺であることをやめてはじめて、世界的なひろがりの読者層をもつことができるよう

になったのである。

「時の試鍊」とは、時間のもつ風化作用をくぐってくるということである。風化作用は言いかえると、忘却にほかならない。古典は読者の忘却の層をくぐり抜けたときに生まれる。作者自らが古典を創り出すことはできない。

忘却の濾過槽ろかそうをくぐっているうちに、どこかへ消えてなくなってしまうものがおびたしい。ほとんどがそういう運命にある。きわめて少数のものだけが、試鍊に耐えて、E 古典として再生する。持続的な価値をもつには、この忘却のふるいはどうしても避けて通ることのできない関所である。

この関所は、五年や十年という新しいものには作用しない。三十年、五十年すると、はじめてその威力を発揮する。放っておいても五十年たってみれば、木は浮かび、石は沈むようになっていく。

(外山滋比古『思考の整理学』による)

問一 波線部 (a) 「比肩」、(c) 「常套句」、(f) 「耳目」の読みを、それぞれひらがなで答えよ。

問二 波線部 (b) 「チュウヨウ」、(d) 「カンパ」、(e) 「マイボツ」を、それぞれ漢字に直せ。

問三 二重傍線部 「あげつらう」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 促進する
- 2 中止する
- 3 誇張する
- 4 批評する
- 5 決定する

問四 傍線部 A 「夏目漱石」の作品として適当なものを、次の中からすべて選び、番号で答えよ。

- 1 雪国
- 2 三四郎
- 3 明暗
- 4 金閣寺
- 5 それから
- 6 破戒

問五 傍線部 B 「流行の色眼鏡をかけて見ている」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 世間の人々が何を好むのかばかりが気になって、自分の好みを主張できないということ。
- 2 一般的なものの見方とは異なる特別な考えにもとづいて、社会に接しているということ。
- 3 多くの人が身につけているものを、自分も受動的に身につけてしまっているということ。
- 4 過去に起こった出来事を基準にすることで、未来を常に批判的に見てしまうということ。
- 5 一時的に世の中に広まった特定の価値観にとらわれて、物事を評価しているということ。

問六 傍線部 C 「細部が欠落して、新しい性格をおびるようになる」とあるが、本文中の『ガリバー旅行記』について言えば、①「欠落」した「細部」、②「新しい性格」にあたるものは、それぞれ何か。①、②ともに本文中から二字で抜き出して答えよ。

問七 傍線部 D 「一般に諷刺というものは、風化が急速に進むのが一般である」とあるが、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 諷刺の多くは特定の人物を批判したり否定したりするものであり、その社会の一般の人々にとっては、道徳的な意味で、なるべく早く忘れ去りたいものだから。
- 2 諷刺は十八世紀のヨーロッパに生まれた特異な表現技法であり、時代や地域が異なると、その表現が持つている感覚を、人々が読み取れなくなってしまうから。
- 3 諷刺はその時々々の社会の状況と深く結びついて成り立っているが、時の経過とともに社会の状況は変わり、人々は諷刺の意味を理解できなくなってしまうから。
- 4 諷刺はその時代の権力者によって生み出され、価値を与えられるが、権力者がいなくなれば、人々が諷刺を受け入れることの意味自体がなくなってしまうから。
- 5 諷刺が人々に好まれるのは、政治に対する強い不満がある時代に限られており、政治に対する不満がなくなれば、それとともに諷刺の人気も衰えてしまうから。

問八 傍線部 E 「古典として再生する」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 時間の経過の中で、作品が元来の意味とは異なる意味を付与され、長く読み継がれるものになること。
- 2 時代の変化の中で一度は消えた作品が、題名を変えることで再び多くの人に読まれるようになること。
- 3 作者の手を離れた作品が、時代に合った改編を受けることにより、姿を変えながら存在していくこと。
- 4 発表当初から人気のあった作品が、多くの人々に読まれることで、より影響力の強い作品になること。
- 5 普遍的なテーマで書かれた作品こそが、発表当初の評価は低くても、結果的には生き残るということ。

問九 本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 『地上』で有名になった島田清次郎は、夏目漱石の登場によって評価が下がり、今では名を知る人すらいなくなってしまうた。
- 2 「現代」が不可解なのは、同時にさまざまな価値観が存在し、真の価値がどこにあるのかを見きわめることが難しいからだ。
- 3 作家の存命中に作品を批判することは、作家自身を傷つけることにもつながるため、現代文学史を試みる人はほとんどいない。
- 4 古典は作者自身が創り出すものではなく、長い時間をかけた読者との相互作用を経て、その結果として生まれるものである。
- 5 『ガリバー旅行記』は、今でこそ世界中で愛される作品となっているが、発表当時は、批判されることが多い失敗作であった。

## 〈選択問題〉

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人の、物を問ひたるに、①知らずしもあらじ、ありのままに言はむは(a)をこがましとにや、心まどはすやうに返り事したる、Aよからぬことなり。知りたることも、なほ(b)さだかにと思ひてや問ふらむ。またまことに知らぬ人も、などかなからむ。Bうららかに言ひ聞かせたらむは、おとなしく聞こえなまし。

人はいまだ聞き及ばぬことを、我が知りたるままに、「さて、その人のことのアさましき」などばかり言ひやりたれば、「いかなることのあるにか」と、C押し返し問ひにやるこそ、(c)心づきなけれ。世にふりぬることをも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、(d)おぼつかなからぬやうに②告げやりたらむ、あしかるべきことかは。かやうのことは、もの馴れぬ人のあることなり。

〔『徒然草』第二三四段による〕

問一 波線部(a)「をこがまし」、(b)「さだかに」、(c)「心づきなけれ」、(d)「おぼつかなから」の意味として、最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

- |               |         |       |          |           |           |
|---------------|---------|-------|----------|-----------|-----------|
| (a) 「をこがまし」   | 1 騒がしい  | 2 幼稚だ | 3 馬鹿げている | 4 凶々しい    | 5 鬱陶しい    |
| (b) 「さだかに」    | 1 すみやかに | 2 確かに | 3 曖昧に    | 4 重々しく    | 5 静かに     |
| (c) 「心づきなけれ」  | 1 不愉快だ  | 2 不安だ | 3 不親切だ   | 4 気がまわらない | 5 好ましいことだ |
| (d) 「おぼつかなから」 |         |       |          |           |           |



- 1 危険だ
- 2 恐ろしい
- 3 はっきりしない
- 4 弱々しい
- 5 問題がある

問二 点線部①「知らずしもあらし」、②「告げやりたらむ」の意味として、最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

①「知らずしもあらし」

- |   |               |   |            |   |                |
|---|---------------|---|------------|---|----------------|
| 1 | きつと知らないはずだ    | 2 | 必ず知っているだろう | 3 | 知らないかどうかはわからない |
| 4 | 知らないわけでもないだろう | 5 | 絶対に知らないだろう |   |                |

②「告げやりたらむ」

- |   |           |   |            |   |           |
|---|-----------|---|------------|---|-----------|
| 1 | 告げてやったので  | 2 | 告げてやるようなのは | 3 | 告知が足りないのは |
| 4 | 告げてやらないのは | 5 | 告げてやらないので  |   |           |

問三 傍線部 A 「よからぬ」について、

- (1) 形容詞「よから」の終止形を答えよ。
- (2) 「よから」の対義語に相当する形容詞を本文中から見つけ、そのままの形で抜き出せ。
- (3) 助動詞「ぬ」の終止形を答えよ。

問四 傍線部 B 「うららかに言ひ聞かせたらむは、おとなしく聞こえなまし」とあるが、筆者がそのように言う理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 質問した相手を傷つけないよう言葉をぼかして答えるのは、大人びた振る舞いと思われるから。
- 2 質問した相手に対してゆつたりと答えるのは、互いに穏やかな気持ちになるだろうから。
- 3 相手が知っているかどうかにかかわらずはつきりと答えるのは、思慮深く思われるから。
- 4 遠慮がちに質問している相手にずけずけと物事を教えるのは、大人のすることではないから。
- 5 自分が試されている質問かもしれないのに自信たっぷりに答えるのは、子供じみているから。

問五 傍線部 C 「押し返し問ひにやる」とあるが、そのようにする理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 使いの者が相手方に手紙を渡すのを忘れているから。
- 2 相手方の説明が不足していて状況を理解できないから。
- 3 一方的に自分が責められることを理不尽に感じるから。
- 4 他人の悪口を言うのは良くないことで、不愉快だから。
- 5 自分の知っていた情報とよく似た話が届けられるから。

問六 筆者は、人に物を問われた際にはどうするとよいと考えているか。次の中から適当なものを三つ選び、番号で答えよ。

- 1 ありのままに言ふ
- 2 心まどはすやうに返り事す

- 3 知りたることも問ふ
- 4 うららかに言ひ聞かす
- 5 「さても、その人のことのおさましき」などばかり言ひやる
- 6 「いかなることのあるにか」と、押し返し問ひにやる
- 7 世にふりぬることをも、おのづから聞きもらす
- 8 おぼつかなからぬやうに告げやる

問七

『徒然草』は鎌倉時代に兼好法師によつて書かれた作品であるが、

- (1) 鎌倉時代の作品として適当なものを、次の中から二つ選び、番号で答えよ。

- 1 大鏡
- 2 新古今和歌集
- 3 太平記
- 4 沙石集
- 5 今昔物語集
- 6 日本霊異記

- (2) 主に鎌倉時代に活躍した人物として適当なものを、次の中から二つ選び、番号で答えよ。

- 1 紀貫之
- 2 小野小町
- 3 世阿弥
- 4 清少納言
- 5 藤原定家
- 6 鴨長明